

ハーバード大学中国研究管見

樋 口 勝

- 一 はじめに
- 二 ハーバード大学の講義
- 三 イエンチン研究所と儒学討論会
- 四 中国語教育
- 五 おわりに

一 はじめに

1999年4月から一年間、創価大学の在外研究制度を利用して、ハーバード大学イエンチン研究所に留学した。その研究所長の杜維明教授の下で、現代新儒学の研究をするのが目的であった。

私がハーバード大学に在外研究をしたいと思った動機は、6、7年前に遡る。当時、集中的に創価大学の創立者である池田大作博士の書物を読んでいた。その中で、特に生命の問題、幸福の問題、道德の問題に関心が寄せられていった。それまでの私は、中国哲学の中でも朱子学における宗教性の問題に関心があったため、『文公家礼』をめぐって朱子の宗教性の問題を模索していた。しかし、方法論で行き詰まりを感じていた。そんな時期に、杜維明教授の『儒家伝統的現代転化』を読了した。

遅まきながら、これが私の現代新儒学との初めての出会いであった。この書物を読んで、実に驚いた。なんと池田博士の思想と共通点が多いことかと。周知の如く、池田博士は大乗仏教、なかんずく法華経を中心にした日蓮仏法

の信奉者であり、杜教授は儒教の現代的意義を探究する現代新儒学の旗手である。私の心の中で、大乘仏教と儒教との対話が始まった。そう言うものの、大乘仏教は宗派性を有する宗教であり、儒教は祭祀や葬送儀礼を除けば、道德の教えという観念がまとわりついていて私には、両者の対話の土俵をどのように設定すればよいのか迷っていた。

ちょうどそのような時期に、牧口常三郎の全集を読む機会があった。中でも、「価値論」に注目した。さまざまな特色がある牧口価値論の中で、私にとって価値と宗教性の問題は新鮮であった。つまり、人間にとって価値創造することが幸福であり、価値の究極は宗教性に結合するという観点は、宗教と哲学あるいは宗教間対話に応用することができるのではないかと感じたのである。その後、牧口価値論と現代新儒家との比較研究を行い、何本かそれに関する論考を試みた。しかし、またしても宗教性の難問にぶつかった。そんな時期に、念願がかなって、ハーバード大学へ留学できることになったのである。

本報告は、本来であれば、上記の問題解決の研究経過を報告すべきであろうが、不明にしてまだその研究経過を報告できる段階にはない。更に言えば、やっと現代新儒学における宗教性と価値の問題の研究は緒についたばかりである。⁽¹⁾そこで、本報告では、私がハーバード大学で見聞したことを中心に紹介していきたいと思う。とは言っても、ハーバード大学における中国研究の現状について詳細に調査したわけではないので、ここでは私が受講した講義、イエンチン研究所の儒学研究会、中国語教育などの一端を体験的に紹介していくことにしたい。

二 ハーバード大学の講義

ハーバード大学では二期制のため、私がボストンに着いた頃には後期授業もほぼ終了に近かった。例年、後期授業は5月初めには終了し、5月中に学

年末試験を行っている。因みに1999年度～2001年度の一年の学事表を見ると、以下の通りである。⁽²⁾

	1999—2000	2000—2001	2001—2002
Freshman Registration	Sept.13(M)	Sept.11(M)	Sept.3(M)
GSAS Registration	Sept.15(W)	Sept.13(W)	Sept.4(Th)
Upperclass Registration	Sept.17(F)	Sept.15(F)	Sept.10(M)
Academic Year Begins	Sept.21(Tu)	Sept.18(M)	Sept.12(W)
Study Card Day	Sept.28(Tu)	Sept.22(F)	Sept.19(W)
Holiday—Columbus Day	Oct.11(M)	Oct.9(M)	Oct.8(M)
Holiday—Veterans' Day	Nov.11(Th)	Nov.10(F)	Nov.12(M)
Thanksgiving Recess	Nov.25(Th)— Nov.28(Su)	Nov.23(Th)— Nov.26(Su)	Nov.22(Th)— Nov.25(Su)
Winter Recess	Dec.22(W)— Jan.4(Tu)	Dec.20(W)— Jan.1(M)	Dec.14(F)— Jan.1(Th)
Fall Reading Period	Jan.5(W)— Jan.16(Su)	Jan.2(Th)— Jan.12(F)	Jan.2(W)— Jan.13(Su)
Holiday—M.L.King Day	Jan.17(M)	Jan.15(M)	Jan.21(M)
Midyear Examinations	Jan.18(Tu)— Jan.26(W)	Jan.13(Sa)— Jan.23(Tu)	Jan.14(M)— Jan.23(W)
Second Term Begins	Feb.2(W)	Jan.31(W)	Jan.30(W)
Study Card Day	Feb.9(W)	Feb.7(W)	Feb.6(W)
Holiday—Presidents' Day	Feb.21(M)	Feb.19(M)	Feb.18(M)
Spring Recess	Mar.25(Sa)— Apr.2(Su)	Mar.24(Sa)— Apr.1(Su)	Mar.23(Sa)— Mar.31(Su)
Spring Reading Period	May 6(Sa)— May 17(W)	May 5(Sa)— May 16(W)	May 4(Sa)— May 15(W)

Final Examinations	May 18(Th)-	May 17(Th)-	May 16(Th)-
	May 26(F)	May 25(F)	May 24(F)
Holiday- Memorial Day	May 29(M)	May 28(M)	May 21(M)
Commencement	June 8(Th)	June 7(Th)	June 6(Th)
Summer School	June 26(M)-	June 25(M)-	June 24(M)-
	Aug.18(F)	Aug.17(F)	Aug.16(F)

学事表が示すように、5月初旬には後期授業が終了し、その後 Spring Reading Period という試験の準備期間を経て、5月下旬には学年の全日程が終了する。それゆえ、日本の新学期である4月に、アメリカに在外研究に行った私にとって、何とも拍子抜けしたものだった。しかし、9月までの間、E.S.L(English as a Second Language) の学校に通って、英語の勉強をしたり、ハーバード大学の様々な機関が主催する研究会や講演会に参加することができた。

(1) エクステンション・スクール

ハーバード大学のエクステンション・スクールでは、主に夜間に授業が行われ、13000人以上の様々な年齢層の学生に学ぶ機会を提供している。彼等はニューイングランドの各州から通学し、その多くが一つか二つのコースを選択して新しいものを学んだり、仕事上のスキルの向上を目指している。また、様々な用意されたカリキュラムは、各レベルの学位取得も可能になっている。

エクステンション・スクールの教員の大多数は、昼間、ハーバード大学の各カレッジで同じ講義を担当している。そのカリキュラムは、学部、大学院、単位の無い科目等、様々だが、50以上のフィールドの550以上のコースがあり、コースの範囲は人類学からトルコ語まで、また行政やマネジメント、コンピューター、作文、外国人のための英語、予備医学など、大学院や学部

の学位も用意されている。

日本人研究者にとって必要になるのは、もちろん英語プログラムである。それ以外のプログラムに、わざわざ学費を払って参加する人はいないであろうから。

コースは秋と春の二回募集する。秋は8月末まで、春は12月末までには申込書と学費を添えて申し込み、申し込み後、全員にプレメントテストを行って、クラス分けをする。クラスは、A（初心者）、B（中級）、C（中上級）、D（上級）、E（最上級）の五つのレベルに分けられている。在外研究に行って英会話を学ぶ場合、多くの研究者がこのCかDのレベルに集中しているようだ。レベルCは、弱点を克服し、様々な場面の中で、会話や英作文の精度、範囲、複雑性を増すことに主眼を置く。レベルDは、言語に関する知識を十分に表現でき、その熟練の度合いを増して、学術的にも職業的にも表現能力を拡張するレベルとなっている。

このレベルCとDのクラスには、「Listening and Speaking」「Academic Discussion」「Academic Writing」「Communication in Business」の4コースが設けられ、それぞれ週2回で1回2時間、1学期（3ヶ月）の学費は1コース570ドルになっている。その他、週4回のコースもあり、授業料は1140ドルである。

（2） ESL

ハーバード大学エクステンション・スクールの英語プログラムに相当するのが、各市の教育センターが主催するESLのプログラムである。各市の教育センターには、ESLだけではなく、ハーバード大学のエクステンション・スクールと同じように様々なプログラムが用意されているが、日本人研究者やその家族、あるいは日本人学生にとっても一番お世話になるのが、このESLである。ボストン・エリアで最もESLのプログラムが充実しているの

は、やはりハーバード・スクウェアに近いケンブリッジ教育センター (The Cambridge Center for Adult Education) であろう。

クラス編成は、入門コース (レベル1～3)、中級コース (レベル1, 2)、上級コースの6つのレベルに分けられる。各クラス16名が上限で、週2回、1回1時間半、10週間で授業料は155ドル。週3回や4回の授業があったり、ボキャブラリーや会話中心、アメリカ文化やライティング中心の授業があったりで、ESLだけでも全部で40以上の授業を設置している。

授業料が安いのと、クラスが多く自分のスケジュールに合わせて選択できるので、私も妻も年間を通じてこのESLにお世話になった。問題は教学の質だが、これは担当教員によるのは言うまでもない。私を担当してくれた何人かの教員は、言語学の修士号を取得し、ESLで教えることに情熱的な教員であった。

この他、ハーバード大学の外国人研究者、大学院生の配偶者を対象に、ハーバード・インターナショナル・オフィス (HIO) が主催して、ESLの授業を行っている。レベルは3つに分けられ、前もってプレメントテストをした上で、クラス編成がされるのは、どこも同じである。授業料は週3時間、1回1時間半なので週2回の授業が12週間で150ドル。ティーチング・スタッフは3人で少ないが、経験豊富なスタッフを揃え、受講者には人気があるようだ。

(3) 講演会

ハーバード大学の講演会の予定は、大学が毎週発行する「ガゼット」 (Gazette) に基本的に掲載される。この「ガゼット」は、ハーバード大学の各図書館とホリヨーク・センター (ハーバード・スクウェアにあるオフィスビル) の1階に置いてある。「ガゼット」には、大学のニュース、最近の科学的発見の紹介、人物紹介、ハーバードのコミュニティー紹介、スポーツ、

美術、コンサート、シアターなどが紹介されている。また「カレンダー」欄には、その週の会議、講演会、コンサート、展示会、教会の集会、有料の授業などのスケジュールが掲載されている。該当する講演会やシンポジウムに関連する部署に属していない限り、個々の講演会などのお知らせがくることはないので、毎週、この「ガゼット」をチェックする必要がある。

私の場合は、興味対象がアジア関連なので、イエンチン研究所にある掲示板やお知らせで、情報収集はほぼ網羅できたのだが、他の分野の講演会、例えば宗教関係の講演会などは、この「ガゼット」を活用した。それにしても、多い時は週に100以上もあると思われる講演会や、300以上もあるその他の催しには圧倒される。大小様々な形式の講演会の中で、私が最も多く参加したのは、中国大陆や台湾から来た研究者の講演会であった。テーマもさることながら、中国語で行われたのも私にとってはよかった。

その他、日本から自民党の加藤紘一氏や橋本竜太郎氏などもハーバードに講演に来ていた。受け入れは、それぞれハーバード・ケネディ・スクール、アジアセンターなどであった。

（4） 受講科目

私の専門は中国哲学なので、「中国史」「儒家倫理思想」「比較宗教」「総合講座ジャスティス」それに「中国語」など、中国や宗教、哲学に関連ある講義を聴講した。どの講義もさすがハーバードの教授と思わせる名講義で、拙い英語能力しかない私でも思わず聞き惚れてしまったほど。また、それにもまして学生の聴講態度には感心させられたものである。

それぞれの講義科目にはもちろん教材や参考書はあるのだが、それが一冊であったり、十数冊であったり。また、講義の始めにシラバスが配られ、毎回それに沿って講義が進められる。多くの講義は講義時間が60分で、日本の大学に較べて短いせいか、教授はほとんど余談などせずに粛々と講義を進

める。(もっとも、余談を交えるのは私だけかもしれないが)。ハーバードでは講義の合間の休み時間を設けていないため、始めの10分程度は、学生が入室して多少騒がしい面はあるが、着席するとすぐノートを出して聴講する姿は、さすがハーバードの学生だと感心。また、教授は講義の中で、ユーモアを交えて学生を笑わせたり、時には机に座って学生と対話しながらフランクに講義するところなど、内容と共にその魅力に溢れた授業運営にも感心した。

「中国史」の講義は週3回行われ、半期で通史を終らせる。今季は、先秦から明代までを東アジア学部の学部長であるピーター・K・ボール教授、清代と近代史を歴史学部の学部長であるウィリアム・C・カービー教授が担当していた。「中国史」とは言うものの、「講義要項」よれば、歴史研究の副題に「中国、東アジア文明における伝統と形成」というタイトルが付けられていた。そして、「伝統的な哲学、宗教の形態や社会的、政治的思考を考察することによって、中国文明が如何に形成されたか、また近代世界において如何に中国を理解すべきか」という視点から、「中国史」が語られていた。講義が3回あるとは言え、半期で通史を完結させるのは難しいが、毎回、要点をまとめたプリントが配られ、要領よく通史を学生に理解させていたように思う。因みに、かつて留学した北京大学歴史学部では、週2回の通史の講義を2年間かけて学んだことと対照的であった。

「比較宗教」の講義は、仏教、キリスト教、ユダヤ教、儒教における宗教体験、理念、道德実践などを紹介しながら、多様な異文化間に生きる人間の普遍的な道德性、倫理性を探究しようと試みていた。そして、その教授(チャールズ・ハリッセイ教授)の結論として、学期の最終講義で仏教と儒教の倫理に言及し、「他者のために生きることこそ、自分自身のための最善の道であり、そこに理想人格が顕現される。そして、そのためには、永遠に学び、永遠に道德実践を行う必要があるが、それを目標に努力すれば、あなたもそう

なれる」と言われていたことが印象的であった。

総合講座「ジャスティス」の講義はシアターで行われ、ハーバードのコアカリキュラムの一つだけあって、千名ほどが入るシアターがいつも一杯だった。圧巻なのは、その千名ほどの学生が、講義する教授の話に一心に耳を傾け、時に笑い、時に思索しながら講義を聞き、教授は千名の学生に意見を求めながら、時には討論にもなる授業風景だった。基本教材は、J.S.ミルの「功利主義」という小冊子のみだが、その他アリストテレス、ロック、カントなどと比較しながら、自由と正義、人権と所有権、富の分配、政治的義務などについて考察していた。中でも、これらの問題を現代の問題と絡ませながら、学生に思索させる講義は、今も私の脳裏に新鮮な感動をもたらしてくれる。

「儒家倫理思想」は、私の受け入れの指導教授になって頂いた杜維明教授の担当であった。主に、大学院生を対象にしたプロ・セミナー形式であったが、講義の大半は杜教授が講義し、それに対する質疑応答という形で講義が進んだ。週に一回の講義であったが、一回に3時間行われた。全体を通して、杜教授が強調されていたことは、① 儒教の現象のみを追うのではなく、儒教倫理に見られる精神性の探求が必要である、② 儒教は、人間を中心に、人間（自身）、コミュニティ、自然、天の四者の関係を説いており、それによって儒教のヒューマニズムが完成する、③ 儒教の今後の課題として、生態系の問題、フェミニズムの問題、宗教間対話を推進していくことが必要であり、グローバル化を進める上で重要である、④ 如何に自身をカルティベータイプするか、⑤ 儒教の方法は自己教育であり、儒教は99%が教育である、などであったように思う。いつもながら、中国思想と古今東西の思想や現実の問題とを比較して、如何にあるべきかを語る杜教授の雄弁さには舌を巻いたものである。

その他、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の著者で有名なエズラ・ポー

ゲル教授の「東アジアの産業」やイレヌ・ブルーム教授の「中国と人権」の講義も聴講したが、この二つの授業は共に春学期のものであったので、最初の数回しか出席できなかった。特に印象深かったのは、「中国と人権」の授業で、毎回、教授がいくつかの新聞記事を持参し、いくつかのグループに分けてその記事を討論させ、各グループ毎に意見をまとめて発表させるというセミナー形式で行われた授業であった。学生も積極的に討論に参加し、教授はよく意見を聞いた上で、多少コメントする程度であったが、学生に思索させるという点で興味深いものがあった。また、天安門事件の際の北京大学のリーダーであった王旦氏も、ハーバード大学の学生という身分で聴講していて、自身の体験を話していた。

また、その他に、「中国語」の授業も聴講したが、これは後述する「中国語教育」の章で紹介することにして、ハーバード大学の講義内容で一番感心したことは、どの講義も知識の教授のみでなく、学生に考えさせること、できるだけ現実生活との関連付けをすることであった。社会科学の講義であれば、現実との接点を取り出すことはさほど困難ではないが、人文科学の分野、例えば中国史や儒家倫理思想など、特に近代以前を講義する場合は、現代との関連を考えることは難しい。それでも、「中国史」では、中国の社会、政治、思想を歴史的に概観しながら、常に現状の中国文明や中国民族を理解していこうとするスタンスはあった。また、「儒家倫理思想」では、前述したようにこれまでの現状を踏まえた上で、如何にすべきかを考えさせられる講義であった。更に、他の講義も同様であった。

また、授業風景で感心するのは、学生がまじめに授業を聞き、熱心にノートを取る姿であった。教授は出席を取ることもなく、授業時間になると講義を始めるのだが、時間になると私語は止め、講義を聞くのである。講義科目にもよるが、私が受講した講義の中で、聴講者の層がまちまちであったのは、「比較宗教」と「儒家倫理思想」であった。「比較宗教」は300名ぐらいの

大教室で行われたが、そのうち1割ぐらゐの聴講者が年配者であった。また「儒家倫理思想」は30名ほどの聴講者の内、半分ほどが年配者であったり、他大学の大学院生であった。こういうところにも、生涯教育や他大学との単位互換制度の定着が表われているのかもしれない。

三 イエンチン研究所と儒学討論会

ハーバード大学は文理学院（Arts&Sciences）の下にある学部（Faculty of Arts and Sciences）と、10の大学院（文理学、ビジネス、デザイン、神学、教育学、ケネディ（政治学）、法学、医学、歯学、公衆衛生学）から構成され、文理学院の中にある学部には31のデパートメントが置かれている。それゆゑ、文理学院の規模が他の学院に較べて異常に大きくなっている。中国学に関連する学科である東アジア言語・文明学部（中国語では東亜系と言うので、学部相当として扱われている）や、アジアセンター、イエンチン研究所、フェアバンクスセンターなどの研究機関も、この文理学院に併設されている。

（1）東アジア言語・文明学部

この学部は、主に中国、日本、韓国、チベット、ベトナムの言語、歴史、文学、思想宗教などを学ぶ学部である。カリキュラムのコース分けを見ると、主に仏教研究コース、中国史コース、中国文学コース、日本史コース、日本文学コース、韓国史コース、韓国文学コース、各国の言語コースに分かれている。

ここでは、中国史コースの授業科目を列举しておこう。

For Undergraduates and Graduates

Chinese History 111. Introduction to Chinese History : Pre-Imperial
and Imperial China, ca.1700 B.C.-A.D.755

- Chinese History 112. Introduction to Chinese History :Late Imperial China,755-1700
- Chinese History 114. Introduction to Inner Asian History : Conference Course
- Chinese History 115. Intellectual Change in 17th-Century China : Conference Course
- Chinese History 116a.Intellectual History of China to the Mid T' ang Dynasty
- Chinese History 116b. Intellectual History of China, VIII-XVIII Century : Conference Course
- Chinese History 116c. Modern Chinese Intellectual History
- Chinese History 117. History of Relations between China and Inner Asia I
- Chinese History 118. History of Relations between China and Inner Asia II
- Chinese History 119. The Silk Road : Cultural and Political Interaction on the Trade Routes Across Central Asia.
- Chinese History 120. History of the Mongol Conquest
- Chinese History 121. God and Human in Chinese History
- Chinese History 124. China and Human Rights Primarily for Graduates
- Chinese History 211. Materials and Methods of Sinology : Proseminar
- Chinese History 223. Social and Cultural History of Chinese Religion : Seminar
- Chinese History 224. Introduction to T' ang and Sung Historical Sources
- Chinese History 225r. Topics in Sung History : Seminar

Chinese History 226. Introduction to Sources for Local History

Chinese History 227z. Topics in Middle-Period Sociocultural History :
Seminar

Chinese History 228. Introduction to Neoconfucianism : Seminar

Chinese History 229r. Topics in Ming History

Chinese History 231. Readings in the Chinese Classics : Mencius

Chinese History 232. Topics in Han History : Seminar

Chinese History 235. Topics in Warring States History : Seminar

Chinese History 237. Introduction to Shang and Western Zhou
Inscriptional Materials : Seminar

Chinese History 240r. Reading in Chinese Intellectual History

Chinese History 251. Confucian Ethics : Proseminar

Chinese History 260. Taoism : Conference Course Cross-listed Courses

Historical Study A-13. Tradition and Transformation in East Asian
Civilization : China

History 1824a. China in Modern Times : Conference Course

History 2830a. Late Imperial and Modern Chinese History : Conference
Course

History 2831r. Research Topics in Modern Chinese History : Conference
Course

History 2847. 20th-Century China : Seminar

History 2848a. Introduction to Archival Research in Chinese History
: Conference Course

History 2848b. Introduction to Archival Research in Chinese History
: Seminar

Literature and Arts C-40. The Chinese Literati

Moral Reasoning 40. Confucian Humanism : Self-Cultivation and Moral Community

これらの科目は、99年度の秋、春学期、2000年度の秋、春学期の開講科目であり、且つ学部と大学院の科目であるから、中国の歴史と思想のコースとしての開講数で見れば、それ程多いとは言えないかもしれない。しかし、この学部には、中国文学や仏教、そして中国語などの中国関連の科目が置かれており、また、コア・カリキュラムや他の学部の講義、更に講演会や研究会などを入れれば、中国関連の科目は相当豊富である。

(2) イエンチン研究所

ハーバード大学には、アジアセンター、フェアバンクセンター、イエンチン研究所の三つの中国関連の研究所がある。従来あったフェアバンクセンターとイエンチン研究所に加え、アジアセンターは1997年7月1日に設置された。アジアの経済成長とその世界経済に与える影響を鑑み、南アジアも含めたセンターを設置して、ハーバード大学でのアジア研究と教育をサポート、発展させる目的で設立された。センター長は、フェアバンクセンターのセンター長（設立当初）と兼務で、エズラ・F・ボーゲル教授が担当し、委員会にはハーバード大学の中国学研究の主だった教授が名を連ねている。また、フェアバンクセンターは、1955年にジョン・キング・フェアバンクによって設立され、東アジア、特に近代の台湾や中国大陆の研究と教育の発展を支えてきた。最近では、現代政治から古代史に至るまで、その守備範囲は広く、定期的に講演会やセミナーや会議を開き、奨学金支給のプログラムも実施している。

因みにここで、アジアセンターのエグゼクティブ委員会のメンバーを列記しておくことにしたい。

Ezra F.Vogel, Henry Ford II Professor of the Social Sciences (Chair)

William P. Alford, Henry L. Stimson Professor of Law, Harvard Law School

Peter K. Bol, Professor of Chinese History

Harold Bolitho, Professor of Japanese History

James Cheng, Librarian of the Harvard-Yenching Library

Carter J. Eckert, Professor of Korean History

Andrew Gordon, Professor of History

Helen Hardacre, Reischauer Institute Professor of Japanese Religions and Society

William C. Hsiao, K.T.Li professor of Economics, Harvard School of Public Health

Wesley M. Jacobsen, Professor of the Practice of the Japanese Language

William C. Kirby, Professor of History

Arthur Kleinman, Professor of Anthropology; Maude and Lillian Presley Professor of Medical Anthropology and Professor of Psychiatry, Harvard Medical School

Philip A. Kuhn, Francis Lee Higginson Professor of History and of East Asian Language and Civilizations

Leo Ou-Fan Lee, Professor of Chinese Literature

Roderick Macfarquhar, Leroy B. Williams Professor of History and Political Science

Stephen Owen, Irving Babbitt Professor of Comparative Literature and Professor of Chinese

Dwight H. Perkins, Harold Hitchings Burbank Professor of Political Economy, Frank W. Taussig Professor of Economics

Elizabeth J. Perry, Professor of Government

Susan J. Pharr, Edwin O. Reischauer Professor of Japanese Politics

Oktor P. Skjaervo, Aga Khan Professor of Iranian

Hue-Tam Ho Tai, Kenneth Y. Young Professor of Sino-Vietnamese
History

Wei-ming Tu, Professor of Chinese History and Philosophy

Leonard W. J. van der Kuijp, Professor of Tibetan and Himalayan
Studies

James L. Watson, John King and Wilma Cannon Fairbank Professor
of Chinese Society

Michael Y. Yoshino, Herman C. Krannert Professor of Business
Administration, Harvard Graduate School of Business Administration

前述の2研究所に対して、イエンチン研究所は、ハーバード大学の学長の同意を得て、中国の燕京大学の遺産とチャールズ・M・ホールの遺産を基に、独立した機関として1928年に設立された。当初は、中国文化、アジア大陸、日本、トルコ、バルカンなどの調査、教育、出版の管理や準備がその目的であった。1949年以前、研究所の一部の基金は、中国にある5つのキリスト教系の大学を支援していたが、共産革命後は燕京大学などが廃校になったため、ハーバード大学において専ら東アジア研究に従事し、イエンチン図書館の拡充・発展を推進し、有名な「哈佛燕京学社引得」を刊行した。1950年代からは、その活動の重点はフェローシップ・プログラムになり、1954年に訪問学者プログラムが用意されてから現在に至るまでに、ほぼ600名近くの海外研究者に奨学金を支給し、ハーバード大学での1年間の研究生活をサポートしてきた。現在は、この訪問学者プログラム以外に、ビジティング・フェローズ・プログラムとドクトラル・スカラーシップ・プログラムがある。

また、ハーバード大学から奨学金の支給を受けないアソシエイツという資格もある。これは、奨学金の支給はないものの、ハーバード大学での設備（図書館やコンピューター）の使用や講義への出席など、他のプログラムと全く同様の待遇を受けることができ、本国の大学で在外研究制度の適用を受けた研究者などがこの待遇であった。私は対外的には訪問学者の扱いであったが、ハーバードの学内的には奨学金を受給しないアソシエイツであった。このアソシエイツという身分であれば、ハーバード大学の受け入れ単位の実任者が許可すれば、比較的易しく留学することができるように思う。

（３） 杜維明

イエンチン研究所所長。1940年、中国・雲南省昆明市に生れる。1961年台湾・東海大学を卒業後、ハーバード・イエンチン奨学金にてアメリカに留学。1968年ハーバード大学で博士号取得。その後、プリンストン大学、カリフォルニア大学バークレー校を経て、1981年ハーバード大学中国史、中国哲学教授。ハーバード大学宗教委員会主席、東アジア言語・文明学部長を歴任。1988年アメリカ文理アカデミー会員。1990年ハワイ東西センター主任研究員、文化研究所所長を歴任。

杜維明教授は、現代新儒学の第三世代の旗手として、アジアのみならずアメリカ、ヨーロッパなど東奔西走し、儒学の現代的意義の探求、東西文化の交流の促進に挺身している。杜教授の主な主張としては、70年代に提唱した「儒学の第三期の発展」が挙げられる。それによれば、第一期は原始儒家の時代、第二期はインド文化である仏教に刺激されて発展した宋明儒学。その第二期は、異文化である仏教の挑戦に対する応戦として、インド文化を消化し、中国特有の思考様式を提起したのが宋明儒学であった。それに対して、今後、儒学の第三期の発展を志向するならば、西洋文化を正視し、西洋文化の挑戦に対して、儒学が如何に応戦していくかが重要であると言う。

そして、以下の次元でその応戦が行われていくとしている。第一に、超越の次元。儒学は、超越と内在の面を有するが、西洋の宗教の伝統に対する応戦が必要になる。第二に、社会、経済、政治の次元。これは儒学の社会的役割の面と関係し、特に儒学とマルクス主義との対話が必要になる。第三に、人間性の暗部を探究した心理学との対話が必要であり、儒学はフロイトの学説や存在主義との対話が可能かどうか問題になる。更に、英米の分析哲学、言語哲学、現象学、解釈学、構造主義など、また政治学の思潮や自由、人権などに対する態度を表明しなければならないと言う。

以上のことから明らかなように、杜教授のスタンスは、儒学の現代的意義を探究し、中国の現代化に貢献するというものだけではなく、グローバルな立場から現代社会が直面する危機的な諸問題を分析し、儒家伝統の中にその新たな解決の方途を見出そうとするものである。それ故に、文明間対話の重要性を強調し、中でも儒教の中に見られる宗教性を探究することによって、宗教間対話の橋渡しの役割を果たせると主張している。

(4) 儒学討論会

ハーバード儒学討論会 (Harvard Seminar in Confucian Studies) は、現在、特に大陸の中国哲学の学术界で大きな反響を呼んでいる。それもそのはずで、多くの大陸の学者がハーバードに留学し、その多くは毎週行われる杜維明教授主催のこの儒学討論会に参加し、儒学を中心に東西文化比較を行い、中国文化の発展をめぐる討論しているのである。

このハーバード儒学討論会の淵源は、杜教授がハーバード大学教授に就任する以前の10年間、カリフォルニア大学バークレー校に勤務していた頃にまで遡ると言う。当時、西海岸という地域性はあったが、杜教授を中心にして何人かの研究者が集まって討論会を行っていた。そして、1982年に杜教授がハーバード大学の教授に就任するに当たって、大学当局に「ハーバード

「儒学討論会」を組織することの承諾を得たと言う。しかし、現在のように、毎週行われるようになったのは5年前からで、それまでは1年に1回、一週間ほどの集中的な読書会、勉強会を行っていたようである。

現在は、毎週月曜日の午前9時半から、ハーバード大学の東アジア言語・文明学部の会議室（イエンチン図書館の裏手の建物）で2時間半にわたって行われている。毎回、20～30名の研究者が集まり、報告者が1時間の発表をした後に、質疑応答が行われる。質疑応答と言っても、質問者は自分の意見をとうとうと開陳することが多く、確かに討論会の様相であった。参加者は、イエンチン研究所、フェアバンクスセンター、東アジア言語・文明学部などに訪問学者、客員研究員として留学している大陸、台湾、香港からの研究者が主体で、他にハーバードの儒学研究者も参加していたが、ほぼ全員が中国人でもあり、使用言語は中国語であった。

98年度の年間テーマは「儒学における中心価値の現代社会に対する対応」であり、99年度は「儒学と自由主義」というテーマであった。私は98年度の最終（5月）から、99年度の後半（3月）まで参加することができた。年間の中心テーマを見ればわかるように、主に現代新儒学の立場から儒学を捉え、儒学の現代的意義は何か、如何に中国文化を発展させるかという問題を、西洋思想との比較を通して探求していこうとするスタンスであった。因みに、私が参加した討論会の個別のテーマは、「思想史の方法における認識と価値の問題」、「性学と心性の学」、「中庸：普遍的倫理としての考察」、「儒学における形而上学」、「現代化：科学技術革命から伝統の復興まで」、「儒学と科学：科学史からの探求」、「国家と社会関係から見た中国農民の政治参加」、「学術の体制、西洋の経験、文化の守成：一つの知識集団の過程」、「人道主義から見た儒家の仁学と自由主義との対話の可能性」、「人間と自然との関係の再構築」、「新枢軸時代における文明対話」などであった。新儒家的なテーマが主体ではあるが、参加研究者の専門は儒学に限らず、哲学、歴史、文学、

政治、経済、社会学など多岐にわたっていた。

杜教授によれば、討論の方式は「問題意識」を形成することが大事であるから、そのために報告者は前もって中心課題と大綱を知らせる必要がある。また、討論の立場の正否は大きな問題ではなく、問題に対する切り口を重視し、対話力の水準や内容のレベルを高めることを企図しているとのこと。それゆえ、討論会での発言は外に漏らさないことが原則である。また討論会の内容の公表については、年度末に発表者が執筆する原稿に集約され、それをイエンチン研究所が出版することになっているようである。

一年間の受講を通して、杜教授の報告や意見を聞く機会を得た。私の今回の留学の大きな目的は、新儒学に見られる宗教性と価値の問題について、また儒家の宗教性と儒家倫理に見られる普遍的意義との関係について探求することであった。その問題について、直接的な回答が得られたわけではないが、①これまでの文化の普遍的意義は西洋的意義に由来してきたが、今後は文化の地方性、特殊性の中に普遍的意義が包含されていると見るべきであり、その意味で儒家文化の普遍的意義を探求することが必要である。②儒家が今後、発展していくためには、現代世界で問題になっている生態系・環境問題、女性主義の問題、宗教多元主義の問題、人類の普遍的精神の問題に対して、儒家の立場から回答していくことができるかどうかによる、③人間の尊厳と自由の問題では、人間は様々な環境を通して自己を拡大し、それによって個人の自由を獲得できる。また、その基本は、全ての環境の中心点である自己にあり、自愛にある。④人間は宇宙の大化発展における宇宙の参与者であり、それ故に人間は宇宙の創造者、あるいは破壊者である、などの観点は、私の問題意識を大いに刺激してくれた。（この杜教授の見解は討論会のみでなく、著作や個人的に面談した時にも言及している）また、討論会に参加した他の研究者の意見も大いに参考になったことは言うまでもない。

四 中国語教育

本章では、ハーバード大学の中国語教育の概略について紹介したい。というのも、三つのレベルの中国語授業に参加して、アメリカ人の語学能力に対する私の偏見を修正しなければならないと痛切に感じたからである。かつて私が北京大学に留学していた頃、アメリカ人留学生は優秀な学生であっても、会話はできて文献はあまり読めないという印象があった。アメリカ人にとって中国語の読解は極めて難しいと、私自身が勝手に解釈していたのであろう。またかつて、日米貿易摩擦の際に、アメリカ人の語学の勉強不足を批判の対象にすることはなかっただろうか。恥ずかしながら、当初それが、ハーバードの語学教育にも当てはまるような錯覚を多少抱いていたように思う。

率直に言えば、中国語を履修しているハーバードの学生の中国語レベルは、日本の中国語学科の平均的学生よりも高いかもしれない。もちろん、中国語の学習意欲がある学生のみが継続して履修するので単純に比較することはできない。ただ、ハーバードの学生の場合、東アジア言語・文明学部の学生に限らず、文理学院における他学部の学生も受講することができ、大学入学後、初めて中国語に接した学生であっても、レベルは極めて高いのである。その一端を紹介して、今後の参考の用に多少なりとも供することができれば幸いである。

（1）中国語プログラムの概略

ハーバード大学の中国語教育は、他の東アジアの言語（日本語、韓国語、ベトナム語、モンゴル語など）と共に、東アジア言語・文明学部（中国語で東亜系という）が管轄するプログラムである。それゆえ、教員も東亜系に所属しているが、専任の語学教員（プログラム主任1名と各レベルのコーディネーター5名）であっても任期は8年間とのこと。また、この外、各レベル

に、コーディネーターを補佐するネイティブのドリル・インストラクター（任期1～2年）、ティーチング・アシスタントがいて、総勢15名のフルタイム教員でハーバード大学の中国語教育を担当していた。

学生は東亜系に限らず、他学部や文理学院以外の大学院からも履修することができ、実際、私が受講した授業では大半が東亜系以外の学生であった。つまり、中国語あるいは外国語を履修する場合、どの学部の学生であろうと同じように履修するわけであるから、日本の大学のように、第一、第二外国語などの教養科目としての語学ではなく、本格的に語学を学ぶために履修するのである。それは、東亜系の場合は1言語は必須科目（3年間）であるが、他学部の場合は語学科目は必ずしも必須ではないことから知れる。語学科目の負担は大きいので、他学部の学生は語学科目を履修する前に、インストラクターと相談して履修するかどうかを決めるとのことであった。

レベルは初級、中級、中上級、上級に分かれ、基本的には各学年にそれぞれが配当されている。因みに、各レベルのコース名を挙げると以下のようなになる。

Elementary Chinese:

Chinese Aab インテンシブコース、1日2時間、週10時間
5日間の内（2日文法、2日ドリル、1日会話）
半期で通常コースを終了

ChineseBa 通常コース（秋季科目）、1日1時間、週5時間
5日間の内（2日文法、2日ドリル、1日会話）

ChineseBb 春季科目、Baの継続

ChineseBx 中国語既習者のコース。主に中国系のためのコースで、
会話はできるが、読み書きができない学生のコース
1日1時間、週5時間

Intermediate Chinese

Chinese 101a 2年次の通常コース（秋季コース）、時間配分は同上

Chinese 101b 同上（春季コース）

Chinese 101x 中国語既習者のコース、Bxの継続科目

Chinese 102ab インテンシブコース。Aabの継続科目

Advanced Chinese I

Chinese 105a 3年次の通常コース（秋季コース）、時間配分は同上

Chinese 105b 同上（春季コース）

Advanced Chinese II

Chinese 110a 4年次のリーディングコース、週3時間

Chinese 110b 同上（春季コース）

Advanced Chinese Conversation 113a 上級会話、週3時間

Advanced Chinese Conversation 113b 同上（春季コース）

Chinese 200 中国語教育法、半期コース

その他、広東語や中国の文学、文化のリーディングコースも設けられている。

単位は1コース（週5時間）の半期で4単位なので、通年で8単位になる。東亜系の学生であれば、3年間はアジアの言語を履修する必要があるので、1言語で24単位は取得しなければならないわけである。また、学生が1時間の授業を受講するために、2～3時間はかかる宿題の提出を義務付けているとのこと。要するに、彼らは少なくとも1日に3時間の語学（もちろん1言語）の勉強を3年間続けるのである。しかも、全員ネイティブかネイティブに近いレベルの教員が、初級の前期以外は直説法で教える。1年次の後期は50%近く、2年次は80%、3年次以降になると会話は当然として、文法や語句などの種類の説明も完全に中国語で教えるのである。そのため、事前に宿題をしていないと、授業についていけなくなってしまうとのことであっ

た。

日本であれば、語学の専門コースの学生でも、1日3時間以上学習する学生はそれほど多くはないと思う。ましてや、他学部の学生も選択するのである。中国語プログラムの教員によれば、例年、中国語を履修する学生は、初級が100名前後、中級、中上級が各50名前後、上級は20名前後であるとのこと。こう見ると、6000名以上いる学部生の中国語履修率は高くはないが、それだけ中国語習得に意欲のある学生が履修するということであろう。

(2) 授業参観

1年間のハーバード大学における在外研究の期間中、特に秋学期から中国語プログラムの先生方にご許可を頂いて、3つのレベルの授業にそれぞれ何回か出席し聴講させて頂いた。初級は李愛民先生、中級はクレイグ先生、上級は劉月華先生が担当される授業であった。夏前に、杜維明教授のご自宅で行われたイエンチン研究所のパーティーで劉先生と初めてお会いし、話が弾んだ。と言うのも、私が日本で中国語文法の授業を担当していた時、劉先生のご著作である『実用現代漢語語法』を参考書にしていたからである。また、私の知り合いのハーバード大学の研究員（アメリカ人）が共通の友人であり、彼女の中国語の堪能さが話題になったりもした。ともあれ、劉先生の計らいで李先生とクレイグ先生にご紹介して頂き、本来、授業参観できないところを曲げてご許可頂いた次第である。ここで、改めて三先生に感謝したい。

語学の授業で最も重要且つ難しいのは、初級レベルの授業であろうと思う。その意味で、ハーバード大学で中国語の授業を参観するに際し、初級中国語のレクチャー、つまり文法や精読の授業に興味があった。特に、漢字を知らないアメリカ人にどのように漢字の書き方や読み方を教えるのか、日本人に中国語を教えるのとどういう違いがあるかなど、興味は尽きなかった。しかし、前述したようにネイティブの教員が直説法で教授するのであれば、アメ

リカ人であれ日本人であれ、そんなに違いがあるわけがないのだが、私の頭にはどうも偏見がまとわりついていたように思う。

Baの授業は李愛民先生が担当されていた。李先生はもともと南京で英語を教えておられたが、88年にアメリカにいられてから言語学の博士号を取得され、ハーバードに来られる前は、アメリカの地方の大学でも中国語を教えられていたとのこと。もともと英語の先生であったせいか、英語の発音も流暢さもネイティブに近く、しかも中国語の初級文法を要領よく教え、授業全体が引き締まっていたのが印象的であった。

テキストは、「大学漢語」(College Chinese) というハーバード大学が出版した4冊本を使用していた。語彙数は1000字程である。第一冊はピンイン表記の本文と英語による文法解説、語句解説など、第二冊は繁体字と簡体字による語句と課文、第三冊はコンパニオンブック、つまり手引書として語句や文法事項の例文集、第四冊は練習問題と漢字練習帳である。文法の授業は「大課」と言われ、30名程度の学生が聴講するのだが、この「大課」では基本的に第一冊を使用していた。

授業時間は、他の講義科目と同様に60分である。毎回、授業始めに単語の小テストを行い、その後その単語の解説や用例を示し、単語の定着と語彙を増やすようにしている。1週間に2課のペースで進み、1課につき約20前後の新出単語があるので、1週間に40前後の単語を覚えれば、半期で約500の単語を覚えることになる。この文法の授業以外にドリルの授業と会話の授業があるので、その中で語彙の定着を図ることができるようになっている。もちろん、宿題があるので、定着率はアップするわけである。

また、毎回行う単語の小テスト以外に、ファイナル試験を含めて半期で6回試験を行う。つまり、4課毎にテストを行うわけである。更に、漢字と聴力のテストも別途行うとのこと。すると、1年間に大きなテストだけでも10～12回行うことになる。教員も大変であるが、学生もよくこれだけの授

業についてくるものだと感心したものである。それだけに、1年が終って2年目になると、履修者が半減するのもうなずける。一方、2年目以降も食らいついていく学生の中国語のレベルは、推して知るべしである。

中級のテキストは、『学漢語談中国文化』というハーバードの中国語プログラムが作成した教材である。課文と語彙の二冊に分かれており、一年間に学ぶ新出単語は約1250語である。教材の内容はテーマからもわかるように、一人のアメリカ人が中国に行って経験することや中国の文化についてのことである。担当は、アメリカ人のクレイグ先生が担当されていた。かつて台湾に2年間留学されたことがあるとのことであったが、お世辞ではなく、中国人とほとんど変わらない中国語を話されていた。かつてこの中国語プログラムの教員として、ハーバードで中国語を教えていた私のアメリカ人の友人も、その中国語は見事なものであったが、クレイグ先生の中国語にも驚かされた。中級のクラスは10人程度で行われ、クレイグ先生は80%以上というか、ほぼ全て中国語で授業していた。しかも、学生はゆっくりではあるが、質問に対して的確に回答していた。授業の進め方としては、最初の単語のテストがない分、初級に較べて少しゆったりしていたように思うが、レクチャー以外のドリルや会話の授業も受講するわけであるから、かなりハードであることには変わりがない。

上級の授業は主に4年生を対象にするのであるが、4年生でなくとも中国語のバックグラウンドがある中国系アメリカ人なども履修している。教材はプリントを使用していたが、レベル的に見ると、北京語言文化大学出版社の『中級漢語教程』の上・下冊に相当すると思う。この教材は、中国で1年間中国語を学習した者が学ぶ教材であるから、漢字を知らなかったアメリカ人が学ぶ教材としては、かなり高度なものである。しかし、学生はよく読めていたし、読解もでき、語句もよく知っていた。担当の劉月華先生によれば、全て中国語で説明し、しかも話す速度も中国人に話す速度と同じであっ

ても、学生は理解できるとのこと。授業で学生が話す中国語を聞いていて、学生の会話力は1年間の留学レベルぐらいであろうかと推測した。そのことを劉先生にお伺いすると、会話力も含めて全体的な中国語レベルは、留学1～2年レベルとのこと。劉先生はもともと北京語言学院の教授をされていた先生で、外国人に中国語を教えるための文法研究の権威である。北京大学出身であるから、北京大学の陸劍明教授とも懇意で、よく論争をされたとのことであった。以前出版された『実用現代漢語語法』の改訂版の執筆や、新たな著作も精力的に執筆されている。

（3） 中国語の試験

中国語の成績評価はレベルによって多少異なるが、ほぼ以下のような成績評価を行う。

Homework: 15 %

Attendance and Class Performance: 10%

Oral Interviews and Presentation: 14%

Character Quizzes: 6 %

Review Tests: 30%

Final exams(Audio & Written): 25%

これは初級クラスの評価基準であるが、中級クラスの場合、漢字試験と宿題のパーセントが多少上がるだけで、基準の内訳は同じである。つまり、前述した授業で行われること全てに対して成績評価を行うわけである。それゆえ、どれかが欠けても成績に影響するので、学生は日常的にも語学の学習を欠かさずに行うのである。

では、ハーバード大学における中国語の試験はどのようなものでしょうか。幸い、担当教員のご好意で、アメリカでは公開しないことを条件に、初級（秋学期）のレビューテストやファイナルテストを入手することができた。

ここでは、半年勉強した学生が受けるファイナルテストを示して、ハーバード大学における中国語プログラムのレベルの一端を紹介したい。

.....

For this examination, you may write your answers either in Pinyin or in characters, unless specified otherwise.

I Transcribe the following into Chinese characters. Write as clearly as possible. (10%)

1. Laoshi qiantian jiao women de neixie shengci hen youyong.
2. Zuotian wo shi qi zixingche lai xuexiao de.
3. Zai tushuguan li ni keyi jieshu, danshi buneng tiaowu, ye buneng daqiu.

II Choose the appropriate words to fill in the blanks. A word can only be used once.

1. Zhuozi shangbiar you yi ____ Renmin Ribao he liang ____ Zhong guo Huabao. (ben, zhang)
2. Hezuoshe meiyou zhei ____ maobi. Wo zai Dongfang shudian maile yi ____ . (zhi, zhong)
3. Wode ____ pengyou you henduo ____ zazhi. (Riben, Riwen)
4. Women kaishi shangke de ____ yinggai shi shidian guo-qifen. Danshi jintian wo lai shangke de ____ , laoshi yijing zuowan shengci kaoshi le. (shihou, shijian)
5. Xiao Xie buzai zher. Ta dao Beijing ____ le, mingtian huibu ____ . (lao, qu)

III Choose the appropriate expressions to complete the following sentences. (15%)

1. 這是我的宿舍、我住在_____、歡迎你常來玩兒。
a. 兩樓 b. 兩個樓 c. 二樓 d. 二個樓
2. 小謝上個星期_____了。
a. 回去北京 b. 回北京去 c. 北京回去 d. 去回北京
3. 你現在看中文書_____？
a. 看不看得快
b. 看得不看得快
c. 看得快不快
d. 看得快不看得快
4. 課本已經買着了、但是字典我還_____呢。
a. 不買着 b. 沒買着 c. 買沒買 d. 買着沒
5. 今天晚上我可以不可以_____一個朋友來參加你的晚會？
a. 帶 b. 拿 c. 搬 d. 遇見
6. 老師要我們用毛筆寫報告、要是買不到毛筆、我的報告就_____了。
a. 寫不成 b. 寫不着 c. 不寫成 d. 不寫着
7. 你的這本漢英字典非常有用。你_____？
a. 在哪兒買這本字典了
b. 在哪兒買了這本字典
c. 在哪兒買這本字典
d. 是在哪兒買的這本字典
8. 我明天能不能去看話劇、要看我今天_____我的報告。
a. 寫不寫得完 b. 寫得完寫不完 c. 寫完寫不完 d. 寫得完不完
9. 以前我不會寫漢字、現在我上中文課了、所以_____。
a. 會了寫漢字 b. 會寫了漢字 c. 會寫漢字了 d. 是會寫的漢字

10. 住在這兒不太方便、我想_____。

- a. 到城裏搬去 b. 搬去到城裏 c. 搬到城裏去 d. 去城裏搬到

IV. Negate the following sentences by inserting 不 or 沒 at right places and make other relevant changes where necessary. (7%)

1. 那個收音機我昨天帶來了。
2. 我的同屋今天晚上回得來。
3. 坐公共汽車來學校很費時間。
4. 我們下個星期得帶字典來。
5. 那個新學生寫字寫得很清楚。
6. 我想他有毛筆。
7. 下個學期我跟山本老師學日語。

V. Provide a question which could have plausibly led to the following answer. The underlined words/phrases represent the “focus” around which the question should be formed. Do not ask “*ma*” questions. (14%)

1.

-Zhongwen he Riwen wo dou bu xue, wo zhi xue Yingwen.

2.

-Women you siwei Zhongwen laoshi.

3.

-Wo shi zai Zhongguo xuexi Hanyu de.

4.

-Neige dianying haokan ji le.

5.

-Ta liuyue yao dao Zhongguo qu.

6.

-Nide xin zazhi zai shouyinji xiabian.

7.

-Zhuozi shangbian de bi shi wode.

VI. Translate the following sentences into Chinese. (28%)

1. I still haven't found the new textbook I bought at the Co-op yesterday. Did you see it ?
2. Using a brush-pen to write character is interesting, to be sure, but it is too time-consuming.
3. He asked me if my friend would also come to the party tonight.
4. She went to see the movie with her older sister, not her younger brother.
5. He used to feel that grammar was boring, but now he has come to like grammar.
6. - Do you know the person sitting beside the window ?
-He is a new student who just came from Taipei last month.
7. - This room is too hot. I have a little headache.
- If you open the window on your right, you won't feel hot anymore.

VII. Reading Comprehension - Read the passage on the next page carefully, and then answer the following questions in English according to the passage. (16%)

1. Why did Marvin think that he'll get a good grade in the Chinese exam ?
2. In what way was Zhang Laoshi impressed by the progress Marvin and his classmates made in their study of Chinese ?
3. What was Zhang Laoshi's opinion about Chinese characters ?
4. Where exactly did Marvin and his girlfriend meet for the first time ?
5. How did Marvin and his girlfriend meet each other ?
6. Why did Marvin want to move out of the dormitory ?
7. How is Marvin's new place ?
8. What does Marvin plan to do after taking the exam ?

Date: Sun, Jan 23 2000 23:58:34 -5000(EST)

From: Marvin J. Mao <mjmarvin@fas.harvard.edu>

To: Li-hong Mao <lihong_mao@hotmail.com>

Cc:

Subject: 我明天回家！

爸爸、媽媽：

明天我有中文考試、我差不多都復習完了。因為我上個星期就開始復習了、所以我一定可以考得很好。明天考完了我就回New York 去。

這個學期我學中文學得很不錯。上個星期四我們在中文課上演了一個小話劇。老師都說我們演得特別好。我們演完以後、他們都不停地鼓掌。張老師說、他沒想到、我們只學了十九課、但是已經能用中文演話劇了。我們自己也很高興。這個學期我的漢字考試都考得不太好、張老師說、漢字雖是難、但是很有用。要是想學好中文、就得學會漢字。我想我下個學期還上中文課。

告訴你們一件事情：我有女朋友了。她叫謝美宜、她的父親是從北京來的、她的母親是美國人。她也住在 New York 。我們是在哈佛合作社旁邊的書店認識的。上個月我到書店去買一本張老師說很好看的書、但是我去的時候、那兒只有一本了。旁邊有一個人也想買、她就是謝美宜。最後、書是謝美宜買的、借給我看。認識她以後、我們常常一起去看電影、吃飯、跳舞。我很喜歡她。考完試以後我們都要回 New York 去。回去以後、我帶她到我們家來玩兒、好不好？

对了、下個学期我想搬到學校外邊去。住在宿舍方便是方便、但是我不習慣跟別人一起住。我的同屋常常帶很多朋友來、我不能好好兒學習。我已經在城裏找到了一間屋子。那間屋子不大、但是很乾淨、也很舒服。我可以坐公共汽車去學校上課。

已經很晚了。明天早上八點半就考試、我得去休息了。明天考完了我就跟謝美宜一起回 New York 去。明天見。

Marvin

以上が初級レベルの前期試験である。非漢字圏の学生が、半年でここまでのレベルに到達するのは並大抵のことではない。学生の学習意欲にも感心するのである。

五 おわりに

幸いにして一年間の在外研究をさせて頂いたが、一年間というのは短いものである。そう思って、出発前に日本でできることはなるべく日本で済ませるようにした。ビザや保険のことは当然として、住居、銀行口座、子供の学校、予防接種、車の購入、電話などなど。渡米後、生活環境を整えるためにどれほどの時間を使ったかと考えるとぞっとする。それでも、前任者や友人の応援を頂き、早めに生活を立ち上げることができた。また、ハーバード・

メディカル・スクールの日本人研究者が運営をしているHMJというメーリングリストには、物品の売買やボストンの情報を入手するのにお世話になった。その他、インターネットによって、多くの情報を入手することができた。その意味で、私にとってパソコンは必需品であった。

私が帰国する2000年3月末頃は、木々に芽が吹き始め、私がアメリカに着いた前年の同時期よりも一足早い春の訪れを感じることができた。そんなことも影響してか、帰国時にはハーバード大学を擁するニューイングランドに愛着を感じたものである。ニューイングランドで過ごした一年は、昨日のことのようでもあり、また遠い思い出のことのようにも感じる。自分の研究や研究者との出会いもさることながら、一般のアメリカ人をはじめ多くの国の人との出会い、ハーバード大学の図書館やハーバードスクウェアで過ごしたこと、ニューイングランド地方の旅行など、実に充実した一年であった。

注

- (1) 帰国後執筆した「現代新儒学に見る宗教精神」(『比較文化研究』第18巻、創価大学比較文化研究所、2001所収)では、この問題について扱った。
- (2) 1999-2000 Courses of Instruction Official register of Harvard University of Arts and Sciences 参照。